提出日：２０２１年3月１日

公益財団法人 海外子女教育振興財団
AG5 事務局 宛

2020 年度 AG5 報告書

１．報告者	
（１）学校名	香港日本人学校香港校
（２）氏名	山崎 秀哲

２．実施体制

（１）小学部グローバルクラス
４年Ｇ組１９名 ５年Ｇ組１４名 ６年Ｇ組１３名

（２）中学部
１年１組 ２０名 １年２組 １９名 １年３組 １９名
２年１組 １９名 ２年２組 ２０名 ２年３組 ２１名
３年１組 ２３名 ３年２組 ２３名

３．テーマ

（１）小学部グローバルクラス
ア、グローバルスタディーズにおけるルーブリック指標の作成及びそれを活用しての評価
イ、グローバルスタディーズの理解と持続可能なシステムづくり
ウ、安定した児童数を確保するシステムづくり

（２）中学部
ア、English 授業内で取り組む IB 教育
イ、中学部の探究学習の単元開発を行う

４．目的と概要

（１）小学部グローバルクラス
ア、グローバルスタディーズにおけるルーブリック指標の作成及びそれを活用しての評価
・目標とする到達させたい児童の姿を明確にし、学年に沿った評価指標を作成することで、系統的な指導を実現するため。
・ルーブリック指標を児童と教員が共有することにより、児童が自己評価したり到達目標を具体的に設定したりしやすくするため。
イ、グローバルスタディーズの理解と持続可能なシステムづくり
・グローバルスタディーズの進め方について新赴任教員が理解し、授業づくりができるようにするため。
ウ、安定した児童数を確保するシステムづくり
・香港の情勢や新型肺炎ウィルスの蔓延により香港にいる日本人が激減する中で、いかに受験者を確保するかは大きな課題であるとともに解決することが急務であるため。

（２）中学部

ア、小中一貫教育（小学部グローバルクラス　卒業生の受け入れ）の推進
イ、中学部　総合的な学習の時間を活用して「探究学習」を実践するための単元開発

５．今年度実施した取組み（※研究会や出張等は日程も含め記載してください）

（１）小学部グローバルクラス

ア、グローバルスタディーズにおけるルーブリック指標の作成及びそれを活用しての評価

（ア）赤羽教授とのビデオ会話（９月２５日）

a.「PYP の探究」と「総合的な学習の時間」の違いについて

・新学習指導要領は IB の探究の考え方に非常に近づいてきている。「学びをどう生かすか」

・総括的評価の際に、IB では数値で評価する点が「総合」とは違う。

b.PYP の評価について

・スキルの習得・活用を通して、概念の再構築することがゴールである。

・ATL のスキルに関するルーブリックを作成することは大切。

・ルーブリックは学年ごとに区切るのではなく、３年間を通して到達する姿を示すべし。

・３～４段階ではなく、より細かく設定してはどうか。

（イ）同志社国際アカデミーの荒谷先生と連携（令和２年９月１０日）

・メールで荒谷先生と連絡し、昨年度訪問した際にいただいた資料を基に、ルーブリックを作成。

（ウ）GCIM

・ルーブリックを実際に評価に落とし込むにはどのような工夫が必要か。

イ、グローバルスタディーズの理解と持続可能なシステムづくり

（ア）シンガポール日本人学校クレメンティ校、チャンギ校との情報交換会（１２月９日）

・専門家に話を聞くと、わからなかったことがよくわかる。

・キーコンセプトの使用法について、理解を深める必要がある。

・セントラルアイディアは教科横断的な授業を構成する上でも、児童の思考をあまり散らばらせないためにも必要。

（イ）GCIM を何度も実施。

・IB 教育と総合学習の違いは何か。

・セントラルアイディア、キーコンセプトなどの IB 用語の解釈とグローバルスタディーズとの関連性についての考察。

・香港日本人学校は今後どこに力を入れていくのか。

・新赴任教員がグローバルスタディーズを授業する中で、共有できる資料を作成する必要性。

（ウ）GCM

・グローバルスタディーズとその他の教科、特に英語の授業との関連をどうもたせるか。

・セントラルアイディアを掲げることで、他の教科でも同じ方向性で授業を構成できる。

ウ、安定した児童数を確保するシステムづくり

（ア）フェイスブック LIVE（10 月 9 日）に出演し、グローバルクラスについて紹介。

・グローバルクラスの取り組みについての紹介

・グローバルクラスのことについてライブで質疑応答。

（イ）ブログの活用

・ブログに児童の学習の姿を掲載して更新。

（ウ）編入学説明会を ZOOM で開催

・香港内だけでなく、日本や海外（米国）からも参加可能になった。

（エ）編入学試験のもち方の変更

・国外の児童も受験できるように、オンラインと学校でのハイブリッド型入試を採用。

（ただし、国外からの受験者がおらず、結果的には学校内での試験実施のみとなった）

・英語作文と日本語作文以外の試験をタブレットで実施。アプリはグーグルフォームを使用。

エ、その他

（ア）英語教育

a.カリキュラムの変更

・オンライン期間では週４時間のうち、２時間を学級での英語の授業、残りの２時間をグループ授業とした。

・学級での２時間の英語の授業のうち、１時間はグローバルスタディーズと関連付けた授業を展開した。

b.習熟度別授業

・学級内だけでは教員数の関係で対応できなかった英語力の差に対応するため、学年を解いた。

・学年を解いて４グループをつくり、それぞれの英語教師が決められたテーマに沿って授業を展開した。

（イ）ICT 機器の活用

a.教育用アプリ「BrainPOP」

・授業の導入や個人探究の資料として活用した。

・資料の種類が豊富なだけでなく、全ての資料にムービーがあり、子どもにとって分かり易かった。

・個人探究やリサーチの際に活用した。

b.教育用アプリ「ロイロノート」

・宿題の配布・提出だけでなく、家庭との連絡や発表時のスライド表示等、幅広く活用した。

・使用法がシンプルなため、児童にとっても使いやすく、プレゼン作成する上では非常に有効的だった。

c.オンライン会議アプリ「ZOOM」

・ブレイクアウトルームや投票機能など、ただ双方向でするだけでなく、様々な機能を活用した。

・個人面談や個別補習にも活用した。

・オンライン授業時には、前任にミニホワイトボードとホワイトボードマーカーを配布し、授業内で活用した。

d.インタラクティブボード

・教師だけでなく、児童もプレゼンのスライド表示をするために活用した。

・オンライン時にもスクリーン及び児童の様子を映すために使用し、まるで対面授業時のような授業が行えた。

・ソーシャルディスタンスを採用した職員研修時や会議などにも活用した。

e.グーグルクラスルーム

・クロームブックを活用していることにより、グーグルは非常に使いやすかった。

・課題配信やスライドチェック、授業で使う資料を事前配布するなど、多岐に活用した。

（ウ）プレゼンテーション集会

・昨年度から開始した夏休みを利用した個人探究発表会を今年度はオンラインで行った。

・プレゼンテーションの準備から発表までのほとんどをオンラインで行った。

（エ）グローバルクラス通信の発行

・グローバルクラスの児童や活動の様子を校内外に伝えるためにグローバル通信を頻繁に発行した。

・年度途中からはグローバルクラスのブログにグローバル通信をアップし、より多くの方々に見てもらえるようにした。

（オ）GC ライブラリー

・多目的教室に GC ライブラリーと称して英語の書籍を補完し、グローバルクラスの児童に貸し出した。

・フィクションやノンフィクションのほかに、英語レベルに配慮した英語の漫画を置いた。

（２）中学部

ア、探究学習の単元開発に向けて

・赤羽教授とのビデオ会話（９月２５日）

・反転授業　中３道徳

イ、English　A クラス（英語科　習熟度別少人数）での取り組み「リサーチペーパー（レポート）作成と発表」

・自分の興味関心のあるトピックを調べる（情報活用能力の育成）

・得た情報の信ぴょう性を確かめる（探究的な学習）

・批判的思考で課題や問題点の発見（探究的な学習）

・話し合い活動による考えの深まり（思考力、判断力、表現力の高まり）

・日本語で考え、英語でレポートを作成（日本語による思考・語彙を増やす、英語による世界への発信）

・効果的なプレゼンテーション作成（相手の立場になる相手意識の涵養）

・発表のスキルアップ（表現力の向上）

ウ、総合的な学習の時間

・中１　マカオ宿泊学習（探究型学習）行事の中止のよる未実施

・中１による中文大学学生との交流会（香港についてリサーチしたことを発表）

・中２による中文大学学生との交流会（日本の中の香港をリサーチし発表）

６．今年度の成果・効果

（１）小学部グローバルクラス

ア、グローバルスタディーズにおけるルーブリック指標の作成及びそれを活用しての評価**【添付資料１】**

・ルーブリック指標を作成した。

イ、グローバルスタディーズの理解と持続可能なシステムづくり

・グローバルクラス及びグローバルスタディーズの理解を図るスライドを作成した。**【添付資料２】**

・作成したスライドを基に、グローバルクラス運営委員会において、グローバルクラスについて管理職に紹介した。

・昨年度作成したカリキュラムマップと共に、新任教師との年度当初学習資料として活用する予定。

ウ、安定した児童数を確保するシステムづくり

（ア）香港在住の日本人が軒並み減少する中で、過去一番多かった昨年程ではないが、受験者数を確保。

・定員 20 人に対して今年度の受験者数は 28 人（昨年度の受験者数 35）

・香港日本人学校香港校の児童数の推移（昨年度４月：296 人、今年度４月：206 人）

エ、その他

（ア）英語力の向上

a, TOEFL Junior 結果より**【添付資料３】**

・昨年度と比較して、総合得点が平均で 11 点高くなった。（総合得点：737→748）
・昨年度と比較して、英語力の差が縮まった。（標準偏差：81→72）
・TOEFL を受検し始めて、3 年間が経つが、総合得点が今までで最も高かった。
・100 点上がった児童がいる等、米英国の児童平均とほぼ同等の得点（47.9 点）が伸びている。
b, 児童アンケートより**【添付資料４】**
・「英語の授業が分かる」と答えた児童の割合が 88%から 96%に上がった。
・「英語の授業が分からない」と答えた児童の割合が 12%から 2%に下がった。
・「英語の授業が全然わからない」と答えた児童が 2%からいなくなった。
・「英語の授業が楽しい」と答えた児童の割合が 86%から 94%に上がった。
・「英語の授業が楽しくない」と答えた児童の割合が 15%から 6%に下がった。
c, 保護者アンケートより**【添付資料４】**
・「子どもは英語の力がついている」と答えた保護者の割合は 91%から 93%と高い数値である。
（イ）ICT 機器の活用
・インタラクティブボードはオンラインの時もオフラインの時も、プレゼン時、授業中の資料提示時、オンライン授業の白板使用時、講演会視聴時などあらゆる場面で非常に活用できた。
・GS や社会、理科の授業の導入時に特にブレインポップを活用できた。
・クロームブックを個人でもったことで、授業中やそれ以外でも度々活用することができていた。
・グーグルクラスルームを活用し、授業を行うことに児童も教師も慣れた。
・クイズアプリの他にも、ジャムボードなど新しいアプリを活用して授業ができた。
a, 児童アンケートより**【添付資料５】**
・「学習の目的に応じて ICT 機器を活用できている」と答えた児童の割合が 95%から 100%に上がった。
b, 保護者アンケートより**【添付資料５】**
・視力の低下を心配している保護者がとても多い。
・ZOOM での授業が増えたため、それによる体調面の心配をもたれる保護者が多い。
・授業時数の減少を心配されている保護者がいる。
・オンライン学習の中で最大限できることをしていることを評価して下さっている。
（ウ）プレゼンテーション集会**【添付資料６】**
・初開催だった昨年度とは違うオンラインでの開催だったが、児童・保護者・参観者から概ねよい評価を頂いた。
・オンライン開催を採用したために、日本にいる方々（祖父母等）にも参観していただけた。
a, 児童アンケートより
・プレゼンテーションスキルが高まったと答えた児童が 93%、英語力が高まったと答えた児童が 87%いた。
・今後のプレゼンのために、発表会後に友だちからや参観者からのフィードバックを得ることができた。
b, 保護者・参観者アンケートより
・アンケートフォームを活用してフィードバックを頂いたが、概ね肯定的な評価を得られた。
・子どもたちの英語力、プレゼン力が高く評価された。
・グローバルクラスの先生たちのチームワーク、指導力を高く評価された。
・昨年度の児童の発表よりも成長した姿を見たと、評価をしてもらった。
（エ）グローバルクラス通信の発行（保護者アンケートより）
・通信を頻繁に発行したことで、グローバルクラスの様子を保護者に伝えることができた。

（オ）GC ライブラリー

・グローバルスタディーズの授業で GC ライブラリーの本をたくさん活用することができた。

・英語版のまんがが、特に英語を苦手と感じている児童に好評だった。

（２）中学部

ア、反転学習による成果

・生徒同士の意見交換の時間が多く確保できる。

・チームとしての意見をまとめる力、思考力の深まりが感じられる。

・批判的思考力を育むことができる。

・学びに向かう姿勢が前向きで主体的な学習につながる。

イ、English

・情報活用能力の育成につながった。

・探究的な思考力の高まりが感じられた。

・批判的思考力が育っていると感じられた。

・レポートから思考力、判断力、表現力の高まりが身に付いた。

・英語でレポートを作成することで世界への発信という意識を持たせることができた。

・相手の立場になる相手意識の涵養につながった。

・発表と他己評価による表現力の向上が見られた。

ウ、総合的な学習の時間

・中１；香港ガイドブックづくりに取り組んだことで、香港を知り、さらには香港の大学生にリサーチしたことを発表し、意見交換を行うことで、考えが深まり、より詳細な香港を知ることができた。

・中２；「香港の中の日本」について、調べる中で、様々な気づきがあった。さらに、日本語学科の大学生へのプレゼンを行うことで、海外から見た日本について理解を深めることができた。また、海外における日本の認識を理解し、日本の良さの再発見につながった。

７．まとめ

（１）小学部グローバルクラス

ア、グローバルスタディーズにおけるルーブリック指標の作成及びそれを活用しての評価

・系統的な評価とルーブリック指標を作成したことで、評価に関して児童と教師が共有できるようになった。

・各学年の到達レベルを設定することで、児童・教師それぞれにとっての目標が明確になった。

・従来の通知表と比べて、文言があるために次のステップまで何が必要なのかということが分かり易くなった。

イ、グローバルスタディーズの理解と持続可能なシステムづくり

・グローバルクラスや IB 教育との関連、グローバルスタディーズの理解を図る資料を作成した。

・カリキュラムマップと共に、来年度新任教師と学習・共有するための資料となるであろう。

ウ、安定した児童数を確保するシステムづくり

・ブログ、ホームページ、フェイスブック、フェイスブックライブなどを活用して広報活動を行った。

・ガイダンスへの参加方法をオンラインにし、受験方法も変えたために、より多くの児童が受験できるようになった。

・受験にタブレット端末を活用したことで、採点が非常に容易になった。

・実際に日本人学校の児童数が３分の２程減少する状況の中で、多くの受験者を確保することができた。

エ、その他

（ア）英語力の向上

・昨年度と比較して、英語力の差が狭まり、それぞれの英語力がどれも高まった。

・昨年度と比較して、児童・保護者が英語の授業に肯定的な意見をもっていた。

（イ）ICT 機器の活用

・学習に応じた ICT 機器の活用ができた児童数がこの 1 年間で増加した。

・一人一人にクロームブックが配布され、対面でもオンラインでも常に文房具のように使うことができた。

・インタラクティブボードをあらゆる場面で活用できた。

・BrainPOP やロイロノート、TWINKL など、多くのアプリを GS や他の様々な授業の中で活用した。

・ロイロノートだけでなく、グーグルクラスルームを使用し、課題の配信・添削を実施した。

（ウ）プレゼンテーション集会

・オンラインで実施したために、昨年度より多くの方に参観してもらった。香港外からの参観者も多くいた。

・準備から発表まですべてをオンラインで実施したために、子どもも教師も ICT 機器の扱いに慣れた。

・児童、保護者、参観者の方々から概ね好評を頂いた。

（エ）グローバルクラス通信の発行

・頻繁に発行することで、保護者にグローバルクラスでの児童の活動を伝えることができた。

（オ）GC ライブラリー

・英語の本を読む児童が増えた。

・英語が苦手な児童でも、英語の漫画を多く借りて読む様子を見ることができた。

（２）中学部

ア、English での取組

・主に批判的思考力の育成に力を入れた

イ、特別の教科道徳での取組

・反転学習を取り入れた授業展開から、生徒の活動を設けることの意義を確認できた

ウ、総合的な学習の時間

・新型コロナウイルスの影響による宿泊学習の中止と取組の大幅な変更

・オンラインによる大学生との意見交換会の実施を計画し、情報収集力、活用力、また、グローバルな視点で日本や香港を再確認する時間を設けた

８．次年度の計画

（１）小学部グローバルクラス

ア、作成したグローバルクラスの評価のためのルーブリック指標を実際に通知表に反映させる。

イ、スピーキング力向上を目的として、学年を解いた英語習熟度別授業週に２時間実施する。残り 2 時間の英語の授業もグローバルスタディーズのトピックと関連した授業内容を採用する。

ウ、児童数確保のために、今年度同様にブログやホームページなどを活用して広報活動を行う。また、試験方法もハイブリッド方式を継続し、より多くの児童が受験できる環境づくりをする。

（２）中学部

ア、道徳、英語の授業で取り組んできた内容を、総合的な学習の時間に取り入れていく。

イ、今年度、取り組んだ English の授業を他のクラス、他の授業にも広げていく。

９．所感
（１）小学部グローバルクラス 「不安定」な一年間だった。児童は通年を通して家庭からのオンライン授業を余儀なくされ、登校ができても半日登校しかできず、新任教員はなかなか香港入りすることができない等、計画していたことやできるはずのことができず、対応に苦慮することが多かった。しかしながら、そんな状況に屈することなく、ZOOM やロイロノートなどのアプリやインタラクティブボードやクロームブックなどの ICT 環境を整え、試行錯誤しながら活用することで、むしろ児童も教師も力をつけることができたのではないかと考える。ただ、グローバルクラスの売りの一つであり、学習に対する子どもの主体性を高める上で価値の高い校外学習に一度も行けなかったことは来年度改善したい。ZOOM を活用した講演やワークショップを実施することはその解決策として有効であると考える。 また、昨年度作成したカリキュラムマップと今年度作成したグローバルスタディーズの理解についてのスライドを活用し、新赴任教員がスムーズにグローバルクラスの担当として、グローバルスタディーズの授業ができるようにしたい。更には、社会状況や必要とされる人材が刻一刻と変化する中で、新しいグローバルクラス担当教員が協力することで、将来活躍する児童を考えた上でのグローバルスタディーズや英語授業のカリキュラムや授業方法の刷新を図っていきたい。 （２）中学部 中学部としては、始まったばかりの探究型学習の単元開発である。しかも、今年度は計画していたことが、新型コロナウイルスの影響でできず、それどころか、政府の判断による合計３回の休校があった。年度当初は、オンラインで授業を行なえるよう環境を整えることを優先した。授業の内容もオンライン学習となり、教科書中心の教え込み学習が中心であった。それでも、教員がオンライン授業や IT 機器の活用に慣れてくると、徐々に、オンラインで行う特別活動や対話的な学習に取り組んだ。この状況でも、探究的な学習を行える単元開発につなげるため、年度の後半では、昨年度研修を行ったことを生かして、反転学習に取り組み手ごたえを得ることができた。さらには、オンラインではあったが、大学生との交流会を実施し、生徒が調べた内容を発表することだけで終わらない学習に取り組めたことは良かった。今後、教員全員で共通認識をもち、様々な実践を行う中で、探究型学習の単元を開発し、生徒の生きる力の育成に努めたい。

※記入欄は適宜拡張してください。